

優秀賞

虹がもたらしたくさんの笑顔

東京都 東京大学教育学部附属中等教育学校 一学年

蔭山 彩綺

その虹は、私の家に笑顔と安心をくれる。

私の家の「普通」は他の家とちよつと違う。私の父は三回の脳梗塞を経験し、そして今でも後遺症により月に一回の入退院を繰り返している。

ここまで言うとき、「大変だね」や「大丈夫？」と言われることが多々あるが、実際父が病気で暗くなったり困ったりしたことは全くないのだ。私は三人兄妹の真ん中で、家の中では常に誰かがマシンガントークを繰り返して、些細なことでも喧嘩が始まるという、静かなときがないような家だ。常に私、もちろん父も含めて明るく楽しくドタバタと何も不自由なく暮らしている。

夏休みの課題としてこの作文を知ったとき、私はすぐに父のことが頭に浮かんだ。先ほど述べたように、父は現役患者であり、毎月入院もしている。それなら、保険にも加入しているのではないか。

家に帰り聞いてみると、やはり保険に加入しているらしく、課題のことを話すとき、今まで知らなかったこともたくさん話してくれた。

父が一回目の脳梗塞で入院したのは、三十歳のとき。ちょうど兄が生まれてすぐのことだったそう。もちろん入院をすることになった。そのとき何が一番心配だったかを聞いたところ、心配は何もなかったらしい。私の目は点。そして「は？」と言ってしまった。

それはそうだろう。生まれたばかりの子どもがいて、心配がないわけがない。心配がなかった理由を聞いてみると、父は、常に最悪の状況を想定し、そうならないように日頃から努めていたからだと言う。

父は、社会人になってからずっと保険に加入していたらしいのだ。保険に入っていることを「当たり前」のことにしておきたかったからだと言っていた。そして、このときも、保険にすぐくお世話になったそう。『実際に『もしも』を経験しないと保険のありがたさはわからない。』とも言っていた。

確かにそうだ。私も社会人になり、最初の少ないお給料の中から毎月、特にすぐには形にならない保険にお金を出すのは気が引けると思う。それを「当たり前」にしたいと最初からやっていた父は、すごかったのではないかと改めて感じた。

保険は家庭を持っているのと、そうでないのでは重みが違うと思う。私はいま、塾にも行かせてもらっている。だが、もし保険がなかったら、どうなっ

第61回中学生作文コンクール

ていただろう。毎月かかる入院費と治療費により、毎日のご飯に困るほどだったかもしれない。そう考えると、保険に感謝しかない。そして、父も金銭面で困らなかったのは、保険などのセーフティーネットがあったからだと言っていた。また父は、子どもには自由に好きなことをしてほしいとも言っていた。父の家での言動は、率直に言うとうざけていると思う。病の影響で体調が悪いときもあるが、いつもはまるで悪ガキのようだ。私の妹にちよっかいをかけては怒らせ、母にもしょっちゅう怒られている……。

そんな父だが、前述のような話を聞いて、自分のことで子どもに負担をかけたくないと思っていることを知り、改めて愛を感じられてとても嬉しかった。

父曰く、「保険とは『もしも』の時のお金だけでなく、『安心』もくれるセーフティーネット」らしい。だから、保険に出費しても、それは「安心」を買っているということなのだと言う。

私が思うに、保険は「安心」と共に「笑顔」を運んでくれている。そして、父が保険に入っているだけで、家族や親戚みんなが安心して暮らしている。私はそれを考え、保険は自分のためだけではないことに初めて気づいた。

今まで全く意識していなかったが、保険は私たちに「安心」と「笑顔」をくれていた。そういう経験をした人は多いのではないだろうか。保険は、苦勞で流した涙の後に現れ、みんなに笑顔をもたらす「虹」なのだ。